

〔書評と紹介〕

小口雅史編

『北方世界と秋田城』（考古学リーダー25）

渡部 育子

本書は小口雅史氏が研究代表者となった科学研究費補助金（基盤研究（B）一般）「律令国家の北限支配からみた、津軽海峡を挟む古代北方世界の実態的研究」の平成二十三年度から二十六年度までの四年間の研究成果を学界と社会に還元すべく開催されたシンポジウムにおける諸報告と討論から構成される。

まず、本書の内容を簡単に紹介する。

本書のなりたち

第1部 秋田城総論―遺構と文字史資料からみた

古代城柵秋田城の機能と特質

秋田城の歴史的展開―国府問題を中心にして―

出土文字資料からみた秋田城

城柵構造からみた秋田城の特質

第2部 秋田城と北方世界の交流の具体相

土師器の色調変化が示す元慶の乱後の

米代川流域在地集落の動態

土製支脚からみる出羽と石狩低地帯の交流について

伊藤武士

熊谷公男

小口雅史

八木光則

宇田川浩一

柏木大延

土器からみた地域間交流―秋田・津軽・北海道― 齋藤 淳

須恵器からみた古代の北海道と秋田 鈴木琢也

五所川原須恵器窯跡群の成立と北海道 中澤寛将

秋田城出土の羽釜・再検討 小嶋芳孝

城柵と北東北の鉄 高橋 学

古代日本列島北部の諸集団間における

鉄鋼製品の流通問題 天野哲也

第3部 総括討論

北方世界と秋田城

むすびにかえて

第1部、伊藤論文は秋田城跡発掘調査の成果を踏まえ、行政・軍事、蝦夷に対する朝貢・饗給機能を基本的機能、物資集積管理、生産施設、外交施設などを特徴的機能と位置づけ遺構群と出土遺物を根拠に論述し、出羽柵・秋田城に出羽国府が所在していたと結論づける。渤海使への対応、対大陸外交を重視した施策のもと、出羽柵と国府が北進したとする。一方、熊谷論文では、秋田城非出羽国府説を展開する。その最大の論拠となっている『続日本紀』宝龜十一年八月乙卯条について、延暦二十三年十一月癸巳条、宝龜六年十月癸酉条とあわせて解釈し、秋田城の停廃問題に関する史料であって国府の移転問題とは関係ないことを述べる。また、渤海使来航を裏付ける考古資料の存在を認めた上で、秋田城で渤海使を安置したとしても国府であることの証拠とならないとする。さらに総括討論で第五四次調査出土の二八号漆紙文書を根拠に秋田城出羽国

府説を強調した三上喜孝氏の発言に対して、陸奥・出羽では主要な城柵には国司が城司として常駐していたので、漆紙文書（メモ）を持って国司が赴任した可能性も考えられ、廃棄場所が国府とは限らないという反論を補註として掲載する。小口論文は秋田城国府説の主要な根拠となっていた文字資料の解釈を、国府説、非国府説の両方の研究史にそって解釈、漆紙文書移動の可能性を示唆する。八木論文は陸奥・出羽両国の城柵遺跡を総合的に比較、分析し、秋田城と特質について論ずる。

第2部では秋田城の北方世界とのかかわりについて考古学の研究成果を中心に収録する。宇田川論文は米代川流域の集落遺跡のロクロ土師器、赤焼土器の坏の色調が時期的に変化することを明らかにし、色調変化の原因を元慶の乱と十和田火山噴火による地域社会再編にともなう律令体制的価値観による管理思想の浸透という点に求めた。柏木論文は出羽と石狩低地帯の土製支脚を比較、石狩低地帯出土のものは米代川河口域と密接な関係があることを指摘した。齋藤論文は北日本地域における八～十一世紀の古代土器から地域間交流の様相を三期にわけて分析し、十世紀後半以降は秋田地域と北方との関係は希薄になったことを明らかにする。鈴木論文は、北海道と秋田の物流（交流）が活発に展開していた八～九世紀を中心に、須恵器や鉄製品と文献史料の物流・交流記事を総括的に検討する。中澤論文は「国家と非国家の境界領域」に出現した五所川原窯の須恵器生産の変遷を取り上げ、技術系譜、生産体制・組織を検討し、この遺跡が日本列島のみならず東北アジアの歴史的動態を理解する上でも重要であることを指摘する。小嶋論文は秋田城跡出土の鉄製羽釜がわが国在来のもので系譜を異にしているが、成分分析の結果、国産

であるという見解に対し疑問を呈し、渤海製の可能性があることを指摘する。高橋論文は九世紀後半以降の北東北での集落遺跡の増加の背景に、製鉄、鍛冶などの鉄生産技術の普及が関連していることを明らかにする。天野論文は古代日本列島北部における諸集団間の鉄鋼製品の流通について、供給地の候補地の一つとして出羽国・秋田城の可能性を検討する。

第3部では当日の討論の内容について三つに論点を整理した形で詳細に記載する。「文献史料、出土文字資料からみた秋田城の性格」では、『続日本紀』などの文献史料の解釈ではもちろんのこと、秋田城国府論を主張する際に有力な資料となる漆紙文書などの出土文字資料を総合的に検討して、秋田城非国府説が妥当である旨を述べる。出土文字資料の移動の可能性を根拠としてあげる。「構造と機能からみた秋田城の性格」では秋田城の国府機能、饗給機能を中心に論点を整理し、秋田城には北方交流・交易の把握という機能があり、今後、そのことを裏付ける実態をさらに追求する必要があるとする。「遺物からみた秋田城の北方交流」では主に考古学の研究成果についての質疑応答が記される。そして、これだけ詳細な分析をしても、秋田城に出羽国府が置かれたのかどうかは断定できないという形でシンポジウムを総括したことを述べる。

本書では、未だ結論をみていない秋田城国府説・非国府説の論争の最前線の状況について、熱い議論が読者に伝わるように構成、記述されている。また、文献史料の少ない秋田以北の北方世界の実態について考古学研究の成果を余すところなく載せられている。評者も聴講という形でシンポジウムに参加したが、平成二十六年十二月二十七日・二十八日の

討論、閉会後も、会場となった秋田市中央公民館サンパル秋田会議室で議論が繰り広げられたことを鮮明に記憶している。先に、感想めいたことを言うのはいかなものかとも思うが、文献史料を扱う立場から、文献史料の解釈がいかに重要であるのか、出土文字資料についてはあくまでもモノとして史料批判を行うことの必要性を、あらためて認識した。そして、秋田城に国府が置かれたかどうか、完璧な説明はつかないことが確認された。そこで、今後の課題として若干のコメントを述べたい。

第一。秋田城出羽国府の存否について、文献史料、出土文字資料の考古資料とも、今一度、厳密な解釈を行う必要があるのではないだろうか。本書の総括討論でも指摘するが、秋田城出羽国府説にとって有力な根拠となる漆紙文書などの資料はモノであり、文献とは異なる。本書ではこれらの移動の可能性について説明するが、国府や城柵で作成された文書類の移動は、一般的にはどのようなケースが想定されるのかということ を明らかにした上で、再度、秋田城、出羽国府の場合について検討すべきである。文献史料の解釈については熊谷論文で言い尽くされているが、再度、史料をたどってみよう。出羽国府の所在地が記される文献史料は『日本三代実録』仁和三年五月癸巳条である。国府が置かれた出羽郡井口の地は山形県酒田市中心部跡に比定される。移転を命じられた旧国府の近くの高台は酒田市八森遺跡に比定する説が有力である。ただし、国府はこの後、城輪に再移転したようである。この史料から弘仁六年以降は、出羽国府が庄内にあったことは確かであるが、それ以前については慎重に考えなければならない。出羽国府の所在地、出羽国府の移転に関して検討しなければならない史料として『続日本紀』宝龜六年十月癸酉

条、『続日本紀』宝龜十一年八月乙卯条があげられる。

宝龜六年紀は「出羽国言、蝦夷余燼、猶未_二平殄_一。三年之間、請_二鎮兵九百九十六人_一、且鎮_二要害_一、且遷_二国府_一。勅、差_二相摸・武蔵・上野・下野四国兵士_一、發遣」というもので、政府は出羽国の要請どおりに鎮兵を派遣しているが、国府移転の是非については記されない。要害の地を鎮めることと国府移転が同時に計画されていることから、国府の位置は反乱蝦夷の残党がいるところと考えるのが自然である。蝦夷の余塵の活動がおさまらないために国府の移転が取り沙汰されているが、このことの意味を、国府が庄内にある場合、秋田にある場合を想定し、どちらが整合性のある説明ができるのか、考古資料も含め慎重に考える必要があると思われる。また、宝龜十一年紀からは、鎮狄將軍安倍朝臣家麻呂の、狄・志良須、俘囚・宇奈古らが秋田城は永く棄てられようとしているのか、それとも旧のように保たれるのかという問いがあったという言上に対して、政府は秋田城に再び兵士を配置することを命じたことがわかる。秋田城に出羽国府が置かれていたのかどうかは別として、宝龜十一年当時、秋田城が機能していなかったことが知られる。そのような秋田城に専当官を配置すること、由理柵が秋田に通じているので由理柵と秋田城の二つの城柵で防禦するよう命令が下された。なお、由理柵の比定地は確定できないが、現在の由利本荘市の沿岸地域にあったものと推測される。また、宝龜十一年紀に、宝龜の初め、国司は秋田は保ち難く河辺は治めやすいと言上し、当時の決定で河辺を治めることになったとあるが、この「宝龜初め」の「河辺」と『日本後紀』延暦二十三年十一月癸巳条「出羽国言。秋田城（中略）伏望永從_二停廢_一、保_二河辺府_一」

者（下略）」の河辺府は同じ場所と考えられるのかということも吟味しなければならない。

第二。この河辺府に関連して、第二次雄勝城説が有力ではあるものの、文献に見える城柵官衙の何にあたるのかまだ決着をみていない弘田柵跡との関係がどうであったのか、仮に出羽国府秋田城説を唱えたとすれば、かわりが出てくる。すなわち、出羽国府の秋田城存否は、弘田柵跡や由理柵など、他の城柵官衙遺跡の研究と結びつくことから、今後、秋田城から南へ、地域を拡大した研究が展開されることを期待したい。

第三。出土文字資料が学界での議論に決着をつけた郡評論争は、評の文字が何時まで使用されたのかを明らかにした点で画期的な意味をもつが、七世紀半ば以降の評制、評制から郡司制への移行にともなう支配構造の変化までを解き明かすものではない。郡評についても文献史料と遺跡調査、出土遺物の総合的考察によって特質が明らかにされてきたように、城柵官衙に関しても、本書でとられる視座をさらに発展させることが期待される。

第四。本書では国府と国府機能を区別して論ずる方向性を示すが、このことは城柵が設置された辺境国だけではなく、他の一般的国についても検討してみなければならない。律令国司制研究の課題と言えよう。

第五に「資史料が少ない」ことは事実であっても、「残された資史料で考える」というのが、歴史学の基礎的方法であることをあえて確認したい。資史料が少ないからこそ、どのような方法論を編み出すのか考えなければならない。文献史学と考古学の協業は以前から行われているが、考古学研究の成果が中心となる第2部の内容とのかかわりにおいて、再

度、文献史料を読み解くことも有効ではないかと思われる。たとえば養老四年に渡嶋津輕津司諸君鞍男を靺鞨国に遣わして風俗を觀させたことについて（『続日本紀』養老四年正月丙子条）、津司の場所はどこか、秋田の可能性はどうかなど、少ない資史料の総合的解釈が求められるところである。

以上、評者の力量不足のため、稚拙な紹介になってしまったが、本書が多くの方々に読まれることを望んでやまない。

（二〇一六年十一月刊、六一書房、A5版、本文三三九頁、

本体価格三八〇〇円＋税）

（わたなべ・いくこ 秋田大学教育文化学部教授）